

野田・関宿の赤痢流行と摩怛利神塔またり

石田 年子

はじめに

利根川・江戸川を擁する野田・関宿地域は善きにつけ、悪しきにつけ、川の影響を受けて暮らしてきた歴史がある。堤防がまだ今ののように堅固ではなかった数十年前まで、小さな洪水は決して珍しい事ではなかった。洪水の次の年は上流の豊穰な土が流れ込み作物の出来がよかつたというが、衛生面からいえば井戸水に汚水が混じることは免れ難く、幼い子供がチフスなどで幾人も死亡したし、悪ければ集落に赤痢や疫病が流行して村の隔離病棟での治療を余儀なくされた。

六、七年前から独自に関宿町の石仏や絵馬・民俗行事などを調査していた私自身が明治三十年（一八九七）にこの地方を襲つた赤痢の大流行を認識したのは、木間ヶ瀬・飯塚地区の白山神社で行つた絵馬調査の時のことだった。この白山神社は、旧木間ヶ瀬村の高倉・武者土・飯塚・前村・鴻巣の五地区を氏子とする神社で、関宿町内では比較的絵馬の多い社である。

調査の当日、鴻巣地区の副総代という古老が説明に立ち会つて下さり、鴻巣地区二十二名が描かれた大振りの拝み絵馬を指して「あれは明治三十年の赤痢の流行の時に掲げたものです。」と話されたことが強く印象

に残つた。

その後、松ノ木地区の天満宮の調査の折りにも、当時の衛生員であつたという岩本倉蔵氏の奉納した絵馬が確認され、銘文には「明治三十年夏、我村は赤痢が猖獗を極め、罹病者は一時八十人余りに達した」とその頃の様子が具体的に記されてあつた。

「猖獗を極める」とは、流行病が猛威を奮う事である。こんな熟語を目にしたのは初めてのことだったが、これ以後「明治三十年の赤痢流行」を追跡調査するうちにウンザリするほどの「猖獗」の文字を目にするこゝとなるのである。

一 朝日新聞の記事より

この赤痢の流行は主に旧二川村、木間ヶ瀬村、川間村の三ヶ村で、昭和十六年（一九四一）編纂の『木間ヶ瀬の歴史』によれば、当時の患者数を二百四十五名、死者八十八名と記している。この数が三ヶ村の総数なのか木間ヶ瀬村のみの数なのかはつきりしないが、いずれにしろ酷い状況で村全体がパニック状態になつたことであろう。左記は明治三十年八月、朝日新聞に載つたそれらを物語る東葛飾地方の赤痢流行の記事である。

木間ヶ瀬は戸数五百余戸にして現患者三十六名、二川は七百六十戸に現患者三十一名、川間は六百八十戸にして現患者四十九名あり。後藤主事の視察に先立ち木間ヶ瀬・川間の両村は隔離避病院を設け、患者を收容しおろしが二川村にはこの設けなく、ある農家の如きは一戸十名の家族中八名まで赤痢のために倒れ、爾後残る一名もまた其の襲う所となりしを生残りし八十餘の老翁が看護しつつある惨状。目も当てられぬ次第なり。(中略) 今日まで避病院にて治療を受けたるものは実際上百名に対し四十名の死亡者ありしも、自宅療養は二十名に対し十六名の死亡者を出し殆ど全数死亡の恐るべきを目撃せしより、新患者らは自ら奮つて避病院に来る者あるに至れりという。

これは東葛飾地区の赤痢大流行を受けて明治政府より後藤新平衡生局長が視察に訪れた十二日の報告という。

また、二週間後の八月二十六日の記事は、

この程の冷気に病勢益々募り、木間ヶ瀬、二川、川間の各村は全村皆患者ならざるなき有様にして中には十二名の家族ごとごとく惨毒に冒されしさえあり。当局者の最も困難とする所は火葬場のなき事にして又、社会衛生の何ものたるを辨知せざるもの多ければ日々の死亡者を予め定めたる火葬場(多くは寺院の域内)に運搬するにあたり村民の苦情甚だしく、ややもすれば不穩の状を呈し、立ち会いの官公吏に向かつて腕力沙汰にも及ばんとする事しばしばあり、

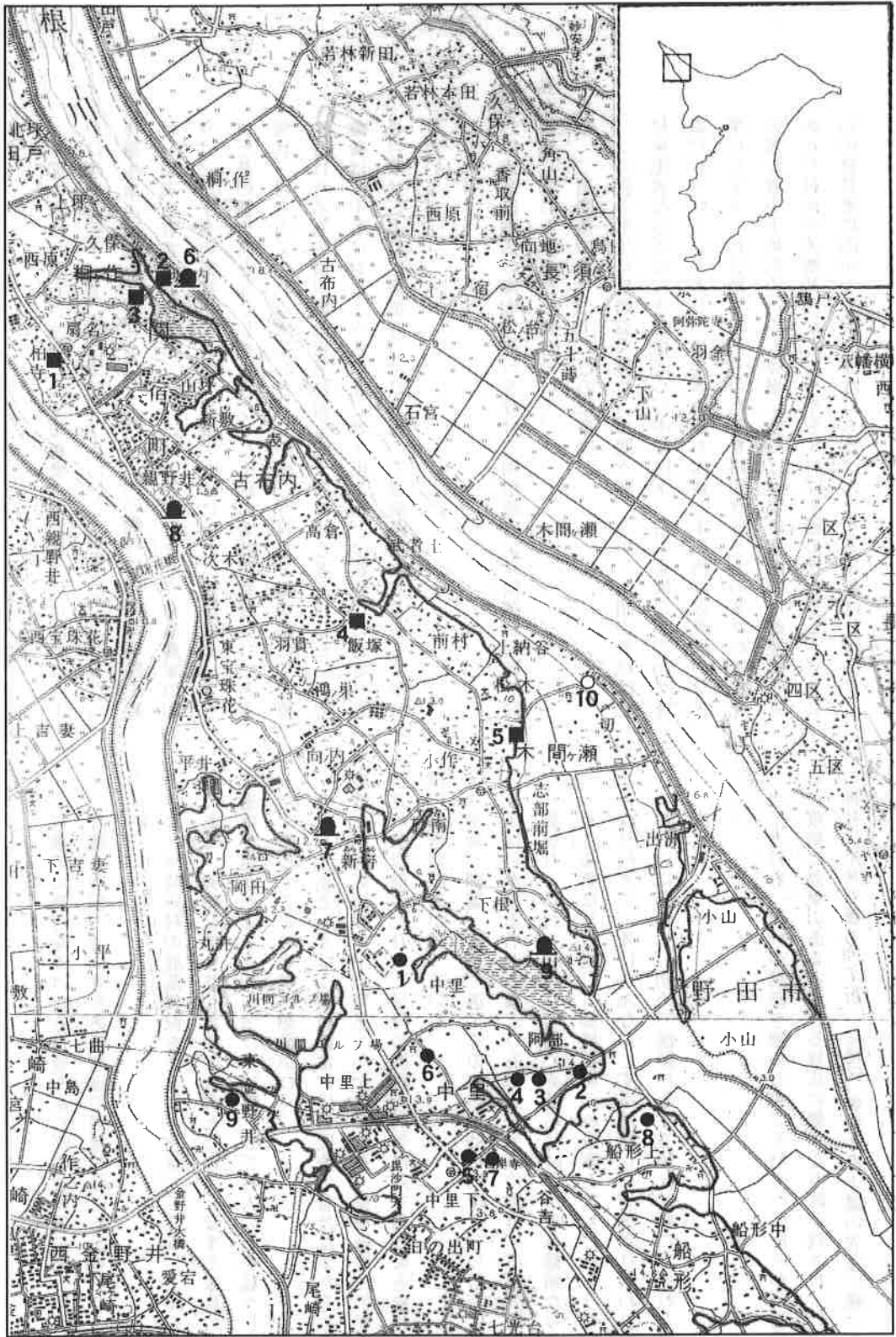
打撲等の暴行を受けたる巡查もあれば各村特置の衛生委員等にして辞職を申出づる向きもあり前途の困難想像にあまりありという

とあり、当時の村の混乱状況を生々しく物語っている。土葬を常とする村である。赤痢伝播を防ぐための火葬とはいえ、愛する家族の死に加えて遺体が焼かれることのショックは時として村人の心を猛々しいものにしたであろうことは容易に想像がつく。

明治三十年といえば、農村部における医療の普及は未だ遅れており、神頼みが病氣治療の中心であつたと思われる。東葛飾地方の赤痢の報道がされる以前の七月に、当時の庶民の病氣に対する姿勢を窺わせる興味深い警告の記事が載っている。

平常、御嶽、富士、道了その他かく神仏に迷信せしものに多く、彼等はいかなる名医名薬よりも講元・先達の調製する御夢想などを有難がり、これを服用して信心を凝らせばいかなる難病なりとも平癒せざる事なしと信じ、加持祈祷のみを事となし、そのうち病い重くなり行きて、死になんなんとするに際し、先達より断わりを受けておおいに落胆し、初めて医師にみする頃には既に手遅れとなりて快癒せず

当三ヶ村も、赤痢が猖獗を極める中でそれぞれの地区が衛生委員を中心に疫病に効果のあるとされる神仏に頼つた痕跡が残されている。鎮守の神社に半月も籠もつて折つた地区。御嶽や富士講の先達に頼つた地区。



- 絵馬
- 石碑
- 金銅仏
- 摩怛利神塔

図1 明治30年銘の絵馬・石碑等の分布

疫病封じに効果のあるとされる他町村の神社に日参し、後に御霊を勧請して神社を建ててしまった地区さえあった。

そこで第1図により明治三十年の絵馬・石碑・金銅仏・摩怛利神塔の分布を散見したい。

〔絵馬〕（図2の番号に同じ）

① 所在地 関宿町柏寺 香取神社

種類 文字額 （縦八〇cm×横一〇〇cm）

銘文 奉納

當字下口氏子

明治三十年九月

② 所在地 関宿町古布内 十二神社

種類 拝み絵 （縦五七・八cm×横四〇cm）

額中央に大人の婦人四名・男の子供一名が描がかれている

銘文 奉納大願成就

明治三十年

十二月吉日

当初

知久利吉

③ 所在地 関宿町古布内一七〇二 八幡神社

種類 赤鬼退治 （縦八五cm×横一四〇cm）

額中央に赤鬼退治の様子が描かれており、七名の人が手を合わせ拜んでいる。

銘文 奉納大願成就

干時明治三十丁酉年六月此ヨリ世間悪疫流行氏子

毎区日夜ノ信心

怠慢ナク別テ新屋敷不儀衛生岩井左蔵委員勤務ナ

ガラ祈念ヲ遂テ升ニ

六名ノ面々数日ノ信仰利益アリ終ニ区中悪病患ヲ

脱シ故ニ岩井左蔵委

員日当料ヲ積置テ名譽ノタメ社頭額画ヲ掲ゲ村内

安全子孫長久

大願成就記詮ノ后世ニ胎サント左ノ図大神威力即

然タル実ニモ奇

ナル哉、異哉尊敬シテ千拝スベシ

世話人

組長 衛生委員

岩井 左蔵 他氏名七名

外参拾壹名 新屋敷講中

明治三十年十一月吉日



② 十二神社



① 香取神社



④ 白山神社



③ 八幡神社



⑤ 松の木天満宮



③の拡大部分



⑤左上拡大部分

図2 絵馬



⑧ 八坂神社



⑦ 須賀神社



⑥ 十二神社



摩怛利 ①



⑩ 神明神社



⑨ 八坂神社



摩怛利 ④



摩怛利 ③



摩怛利 ②

図3 石碑・金銅仏・摩怛利神塔

④ 所在地 関宿町木間ヶ瀬飯塚 白山神社

種類 拝み絵 (縦八五cm×横一二〇cm)

額中央に大人の男性二三名が描がかれている

銘文 奉納大願成就

明治三十年十月吉日

鴻巣区中

左下

明治参拾老年閏三月二〇〇

〔石碑〕 (図3の番号に同じ)

⑥ 所在地 関宿町古布内堀之内十二神社

寸法 高さ cm×幅 cm×厚

紀年銘 大正一五年(一九二六)

銘文 神祭

〔18行〕

同三十年本村伝染病猖獗蔓延シ收容者百有余岩本氏村民人命之為当社二悪病退散祈祷断食手燈無言之大行ヲ行フ
神力偉大忽子全滅故二多数身命救ヒ給フ

大正十五年

基東葛飾郡会議員少数正勳八等

戸塚彦太郎 謹書

⑤ 所在地 関宿町木間ヶ瀬 松の木天満宮

種類 天ノ岩戸開扉の図 (縦四七cm×横六〇cm)

銘文 右上

維持明治三十年之夏我村為赤痢

所襲一時極猖獗前後罹患

者実及八十有余名矣于時

倉蔵在衛生委員之職日

□按該患者專講豫

防鎮定之道数閱月雖然

左上

不為所犯

心靈之冥護不

堪感激茲奉額以表

感謝之微志矣

謹誌

左下

明治参拾老年閏三月二〇〇

〔石碑〕 (図3の番号に同じ)

⑥ 所在地 関宿町古布内堀之内十二神社

寸法 高さ cm×幅 cm×厚

紀年銘 大正一五年(一九二六)

銘文 神祭

〔18行〕

同三十年本村伝染病猖獗蔓延シ收容者百有余岩本氏村民人命之為当社二悪病退散祈祷断食手燈無言之大行ヲ行フ
神力偉大忽子全滅故二多数身命救ヒ給フ

大正十五年

基東葛飾郡会議員少数正勳八等

戸塚彦太郎 謹書

⑦ 所在地 関宿町木間ヶ瀬新宿 須賀神社

寸法 高さ一二九cm×幅五七cm×厚七cm

紀年銘 明治三十年(一八九七)

銘文 〔表〕

高皇産靈神
天御中主神
神皇産靈神

浅間神社

武美拜書

[裏]

明治三十年酉年六月上旬ヨリ

悪疫流行セリ故当社須賀大社

氏子三十一名ニテ七月十七日ヨリ

十月八日迄十二週間昼夜信仰

シテ遂故氏子悪疫災除大願

成就ノタメ建築ス

明治三十年閏十一月十二日

⑧ 所在地

関宿町親野井 八坂神社

寸法 高さ二四五cm × 幅八六cm × 厚一三cm

紀年銘 大正一五年(一九二六)

銘文 神祭

[表]

経津主命

素盞鳴命

[裏]

⑨ 所在地

関宿町木間ヶ瀬大山 八坂神社

寸法 高さ一一八cm × 幅五七cm × 厚五cm

紀年銘 大正一五年(一九二六)

銘文

[裏]

仰八坂大神本津靈ハ武州北葛飾郡田宮村大字大塚ノ里

二鎮座在シ座ス御神徳顕著ナル大神ナリ茲ニ奉斎ノ因縁

ハ去ル明治三十年十一月當地悪疫流行シ益々猖獗ヲ極ム

茲二区内一同本社大神二三区ノ祈願ヲナシタル二神助ノ効

顕直ニ災厄ヲ免レタリ因テ区内一同該神社ノ講社員トナ

リ信仰シ大神ノ神恩ヲ忘却セザル為和魂ヲ祀リ朝夕拝礼シ

テ御神徳ヲ仰ガント時ノ本社社掌松本茂樹惣代遠藤英治両

氏ニ遥拝所設立ノ義懇請シタルニ快諾ヲ得毘クモ社員逆井

貞八ノ地ニ鎮祀スルノ幸ヲ得タリ以後崇拜者日ニ多キヲ

加工境内狭溢ヲ来シ大正五年五月現地ニ移転シ永久ノ神櫃

卜定メ又因テ由緒ヲ将来ニ明瞭ナラシメントシテ石ニ銷ム

大正五年十一月

〔金銅仏〕（図3の番号に同じ）

- ⑩ 所在地 関宿町木間ヶ瀬 神明神社
種類 不動明王 （高さ五〇cm）
銘文

〔裏〕

不動明の来歴が刻まれており、

「明治三〇年九月」の文字が見える

二 摩怛利神との出会い

五年程前のある日、野田市中里に隣接する関宿町木間ヶ瀬・新宿地区で、木の下の落ち葉に覆われて心細そうに寄り添って立つ二基の石塔を発見した。一基は砂岩を加工した大正年代の稲荷だが、庚申塔だろうと思つたもう一基の神名を読んで首を傾げた。縦五十cm程の自然石に刻まれた文字は、「摩怛利神塔・明治三十年十二月吉日・〇〇氏」とある。傍らで農作業をしていた初老の男性に「あれは何の神様ですか」と問うと、この杉林の所有者とのことだったが、さして興味がないらしく面影そうに「なんだか解んねえナ」と素っ気ない。

家に帰って、石仏辞典などで調べて見るが摩利支天や摩多羅神（またらしん）はあつても「摩怛利神」は見当たらない。気になり乍らも解明のすべがなく忘れかけていた平成八年（一九九六）に、野田地方史懇話

会が道標調査を企画し、私は関宿町に隣接する野田市中里・船形地区を担当するグループに入るようになった。道標は寺院・神社・墓地・辻・三叉路・路傍、時には個人宅と全面の調査が必要となる。数ヶ月かけて歩き回るうちに、意外にも神社や寺院の境内に四基ほど件の摩怛利神を発見したのであった。

「摩怛利神の中心は中里地区だったか」と思いながら、それらの内の二基の造立年が明治三十年で、前出の関宿のものを加えると三基が同じ年に立てられていることに気がつく。同時期に中里地区にもまた、赤痢大流行の影響は免れなかつたはずである。もしかすると当地域は赤痢封じに摩怛利という神様を勧請してきたのではなかつたか。ならば、この神は疫病を防ぐ御利益があるのかもしれない。

三 解明した摩怛利神

『密教辞典』には、

摩怛哩又は忙怛哩とも書く。孔雀経に一個の薬叉神として摩怛哩薬叉住於施欲國と説けるもの、是れ摩怛哩神の起源なるべし。（中略）摩怛哩神を以て疫病消除の神とするは、元來此神は疫病を作す神なるがゆえに、その害を蒙らざらんが為に供養するなり

とあり、なんと摩怛利神は疫病を作る女の夜叉だったのである。

どうも八坂神社などの祭神のように疫病神と真つ向から戦ってくれる

神ではなく、それを供養することで疫病をなだめすかし、その上で疫病から免れようとする方式が摩恒利神信仰であるらしい。その後、確認したこの周辺の神塔は次のとおりである。

| ① | 場 所 | 造 立 年 | 碑 文 |
|---|-------------|----------|--------|
| ① | 関宿町新宿 個人宅 | 明治三十年十二月 | 山村氏 |
| ② | 野田市阿部 羽黒神社 | 明治三十年八月 | 天部中 |
| ③ | 野田市阿部 妙楽院前 | 平成十年(再建) | 氏名多数 |
| ④ | 野田市阿部 個人宅林 | 明治三十年 | 氏子中 |
| ⑤ | 野田市中里 川間農協前 | (風化) | (風化) |
| ⑥ | 野田市中里 三社権現 | (風化) | 氏名多数 |
| ⑦ | 野田市中里 個人宅 | 明治四十年九月 | 大野氏 |
| ⑧ | 野田市船形 富蔵院 | 明治三十年十一月 | 船形上信仰者 |
| ⑨ | 野田市東金野井個人墓 | 明治三十三年三月 | 遠藤氏 |

きちんと管理はされているが、なんの神様なのかの伝承は、ほとんどの地区で失われている。そうした中で平成十年に新しい塔を建てた③の世話人を訪ね、それらしい証言を得ることができた。

今は中里に組み込まれているが、③は開発で消えてしまった阿部沼に隣接する阿部という地区にある。造塔の理由は先ものが崩れてきて文字もはつきりしないため、②の羽黒神社の文字を参考にしての再建という。この地区だけは疫神様(やくじんさま)として、現在も疫病封じと

〔表〕 摩恒利神塔一覽

厄除けの利益を念じ、小さな奉り事を年に二度ほど行っているという。ついで阿部地区(④)にも所在するらしいとの情報を得、教えられた道をたどった。

「疫神様はありますか」の問いに老夫婦は暫く首を傾げていたが、「あれかな」と裏の林に案内して下さった。他の塔から比べると小振りで前面の神名は既に崩れて読めないが、造立は間違いなく明治三十年・氏子中とあった。「そう言えば、昔はここにお参りしてから宴会をしていたっけ」と言っていたように、この地区の疫神奉りは随分前に中止になり忘れ去られてしまっていた。

これで明治三十年の赤痢流行時に摩恒利神を積極的に勧請したのは野田市阿部全地区と野田市船形上地区、そして関宿町新宿の個人であることが判明した。そして、その後も小さな流行病がある度に近隣の地区にも何基かが造立されていったもようである。

表の摩恒利神塔一覽を順に見ていくと

① 所在地 関宿町木間ヶ瀬新宿 山村家氏神(図3 摩恒利①)

寸法 高さ四七cm × 幅一八cm × 厚六、七cm

紀年銘 明治三十年(一八九七)

銘文 [表] 摩恒利神塔

明治三十年十二月吉日

② 所在地 野田市阿部下 羽黒神社 (図3 摩恒利②)

寸法 高さ四六cm × 幅三〇cm × 厚二五cm

紀年銘 明治三十年 (二八九七)

銘文

[表] 摩恒利神塔

[右横] 明治三十年八月吉日

[左横] 川間邑中里天部連中

③ 所在地 野田市中里 妙楽院参道 (図3 摩恒利③)

寸法 高さ六二cm × 幅三〇cm × 厚二〇cm

紀年銘 平成十年 (再建)

銘文

[表] 摩恒利神塔

[台座] 氏子一五名記載

④ 所在地 野田市中里 個人宅林 (図3 摩恒利④)

寸法 高さ三五cm × 幅一九cm × 厚 cm

紀年銘 明治三十年 (一八九七)

銘文

[表] 摩恒利神塔

[右横] 明治三十年

[左横] 氏子中

⑤ 所在地 野田市中里 農協前 (図4 摩恒利⑤)

寸法 高さ八〇 × 幅二四cm × 厚一六cm

紀年銘

銘文

[表] 摩恒利神

全体に摩滅が著しい

⑥ 所在地 野田市中里 三社権現神社 (図4 摩恒利⑥)

寸法 高さ五六cm × 幅三九cm × 厚二六cm

紀年銘 両横は風化、剥落が著しい (?)

銘文

[表] 摩恒利神

両側面は風化・剥落が著しい

⑦ 所在地 野田市中里 大野氏宅 (図3 摩恒利⑦)

寸法 高さ cm × 幅 cm × 厚 cm

紀年銘 明治四十年 (一九〇二)

銘文

[表] 摩恒利神

[右横] 明治四十年九月

銘文

[表] 摩恒利神塔

⑧ 所在地 野田市船形 富蔵院 (図4 摩恒利⑧)

寸法 高さ九二cm × 幅五五cm × 厚二〇cm

紀年銘 明治三十年 (一八九七)

銘文

[表] 摩恒利神

[裏] 明治三十年十一月良辰

船形上信仰者中

⑨ 所在地 野田市東金野井 遠藤家墓地 (図4 摩恒利⑨)

寸法 高さ cm × 幅 cm × 厚 cm

紀年銘 明治三十三年 (一九〇〇)

銘文

[表] 厄 厄神

神 摩恒利神

祭 時行神

[裏] 明治三十三年三月二十三日

四 摩恒利神は何処からきたか

では、この摩恒利神たちは一体どこから勧請されて来たのだろうか。日

本石仏協会編集『続・日本石仏図典』の摩恒利神(2)で、松村雄介氏は、

利根川流域の野田市域や守谷町域、水海道市域に近代前期とみられる神名塔が造立されている。水海道市の遺品には「武州目沼郷・写・摩多利神」とある。埼玉県妻沼町の摩多利神社が、摩多利神信仰のセンターだったらしい

と興味深い記述を行っている。

埼玉県妻沼町は日本三大聖天の「妻沼の聖天様」で知られる町で、件の摩恒利神社はその聖天山(寺院)の管理下であり、古墳上の社の中には摩恒利尊天像が鎮座するという。『妻沼町誌』には、摩恒利神社について「樹木鬱蒼として古色を存す疫病神の尊天として、諸人の信仰甚だ厚し」と述べており、昔から疫病除けとして知られた神社であったらしい。

妻沼町より利根川を介しての伝播かと理解したが、最近になって江戸川を挟んだ関宿町の隣町・埼玉県杉戸町目沼地区にも摩恒利神社が存在することを知り訪ねてみた。境内は地図にも浅間神社と記されているように丸宝・丸岩・山重の各浅間講による浅間碑が立ち、目指す摩恒利神は左手奥のお堂の中であるらしい。神社向かいの媼に案内を頼んで堂を開けると中には嘉永四年(一八五二)九月造立の摩恒利神(石碑)が鎮座していた。媼の話では、今も六月の頃に灯籠祭りが行われ、疫病退散の銘が入ったお札が配られるが、昔この神社が疫病除けの神として広く栄えたという伝承はないという。

しかし前出の『続・日本石仏図典』に記載された茨城県水海道市の摩恒利神は野田市のものよりも二十八年も前の明治二年（一八六九）に、鬼怒川水運で栄えた水海道河岸の橋本町八幡神社に造立され、現在も社殿の横に他の石仏とともに立っている。また、守谷町にも造立された形跡があり、江戸川、利根川、鬼怒川を渡つての勧請を想う時、幕末から明治にかけて、杉戸の目沼摩恒利神社は「疫病退散の利益」の神として広く知られた神社ではなかつたと考えざるをえない。

注目すべきことはお札の版木がこの社にあり、世話人たちの手により刷られることである。勧請先の妻沼から代参がお札を頂いて来るのがルールのはずが自前でお札を作るということは、この神社自体が独自の力を持つていた証明のように思われる。妻沼町の摩恒利神社が摩恒利信仰のセンターならば、杉戸町目沼の神社はその中継所ということになるか。

五 関宿町木間ヶ瀬飯塚地区の疫病祭り

この地区は、利根川に注ぐ小谷の台地であり、飯塚地区の協同館（地区集会場）になつている。その横の石物群の中にある、小さな堂内に祭られている行疫神（文政九年六月建立）と阿弥陀如来（天和二年建立）が二つ並んでいる。疫病神は、表に「行疫神」と彫りこまれ石碑である。阿弥陀如来は、光背型である。

この地区唯一の宗教行事で「疫神様・水神様の祭り」がある。九月七日

に行われこの石仏を拜んだ後、赤飯などで会食するという。

明治三十年の赤痢流行時に、この神により被害が少なかつたとして以前は、毎月「疫神様」供養を行つていたが、現在は年に一度だけ地区全体の行事として続けられている。

まとめにかえて

関宿町・野田市の一部に所在する赤痢の記述のある絵馬・石碑・祭りを散見してきたが、明治三十年のものがほとんどである。利根川・江戸川に挟まれたこの地域は、川の恩恵を数多く受けるとともに洪水など脅威にもさらされた。ここに見られる赤痢など流行病も川に起因するかもしれない。

赤痢は、「赤痢菌によつて汚染された飲食物による共通経路伝播が非常に多いことが指摘されている。井戸水・川水などによる集団発生が考えられる。」とある。

これら絵馬・石碑等の所在する地形は、改修以前の利根川や谷津の周辺の台地縁辺の神社等に多い。つまりこの地域が赤痢の発生が多かつたと考えられる。この時代、現代の様に上下水道が完備しておらず飲料水は、井戸や、川を利用していたと思われる。また、生活雑廃水や尿などの処理も十分ではなかつたと考えられる。

紀年銘の明治三十年の前年明治二十九年七月に、関宿・野田が洪水に襲われている。（東葛郡誌大正十二年六月発行）このように大洪水の一年

後に赤痢が発生している。これは前述したように井戸や川に深く関係していると考えられる。また医療が発達していなかった時代は、罹病地区が行った「疫病封じ」等の神仏に頼ることが全てであったろうと思われる。したがって多種多様なものが、出現したのであろう。確たる医療のなかった当時、先人たちは時に応じて頼るべき神仏を選別し、成就の方法を編み出してきたようである。そう考えると各集落に立つ多彩な石仏たちの意味も解るような気がする。

今後調査を続け地域に残る絵馬・石碑等を調査していきたい。

【参考文献】

- ・ 『木間ヶ瀬の歴史』 関宿町教育委員会
- ・ 『朝日新聞縮小版』 朝日新聞社
- ・ 『密教辞典』 法蔵館
- ・ 『続・日本石仏図典』 図書刊行会
- ・ 『妻沼町誌』 妻沼町教育委員会

本稿を草するにあたっては、図版の作成及び本文作成等について、学芸課長瀬戸氏に多大なる指導、ご助言をいただきました。紙面を借りて心からお礼申し上げます。



摩怛利 ⑦



摩怛利 ⑥



摩怛利 ⑤



摩怛利 ⑨



摩怛利 ⑧

図4 摩怛利神塔